2024年５月５日（日）「神と小羊の怒りの日」

ヨハネの黙示録 6:12-17

12 また、小羊が第六の封印を解いたとき、私が見ていると、大地震が起きた。太陽は毛織の粗布のように暗くなり、月は全体が血のようになって、 13 天の星は地上に落ちた。まるで、いちじくの青い実が、大風に揺さぶられて振り落とされるようであった。 14 天は巻物が巻き取られるように消え去り、山も島も、みなその場所から移された。 15 地上の王、高官、将校、富める者、力ある者、また、すべての奴隷も自由人も洞穴や山の岩間に身を隠した。 16 そして、山と岩に向かって言った。「私たちの上に覆いかぶさって、玉座におられる方の顔と小羊の怒りから、私たちをかくまってくれ。 17 神と小羊の大いなる怒りの日が来たのだ。誰がそれに耐えられようか。」

【序論】

私たちは常に「人生の終わり」を目の前に置いて生きています。無意識にではあっても、どんな時にも「終わり」について考えているのです。人生は時間に追われ、私たちは自分の寿命には限りがあることを知っています。刻一刻と迫り来る「時」に備え、今どう生きるべきかが問われているのではないでしょうか。聖書はこのように「個人的終末」について考えることを教えていますが、同時により大きな次元の終末すなわち「世界的終末」についても教えています。世の終わりがどのように到来し、その時どんなことが起きてくるかを絵画的に読者に伝達している。そして、個人的終末と世界的終末は無関係なのではなくいずれも私たちの永遠を決定する重要性を有していると教えています。

今日の箇所は、最後の審判の前夜に起こる出来事を描いています。これを学ぶとき、私たちは今どう生きるべきかが示されていくでしょう。

【本論】

６章に入ってから見てきた、第一から第四の幻では「戦争・飢饉・疫病」という災いが告知されましたが、第五の幻では「殉教者の祈り」という異質な要素が出てきて、災いは一旦中断されました。ところが、第六の幻ではこれまでに語られてこなかったレベルの天変地異、まさに終局的なしるしとなる現象が示されます。

<u>本論Ａ．終末の天変地異</u>

a. 大地震

また、小羊が第六の封印を解いたとき、私が見ていると、大地震が起きた。（6:12a）

聖書において地震は、神が来臨されるしるしとしてたびたび登場します。いくつかの個所を引用してみましょう。

・　**シナイ山は山全体が煙に包まれていた。主が火の中を通って、山の上に降り立たれたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。**（出 19:18）

・　**彼らの前に地はおののき、天は震えた。太陽も月も陰り、星はその輝きを失った。**

（ヨエル 2:10）

最後の審判の前夜には地震が群発するだろうと主イエスも語っておられます。

民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。

（マタイ 24:7）

日本列島は火山列島でありますから、私たち日本人にとって地震は珍しいものではありませんが、ここ 100 年の間に起きた代表的な大地震としては、1923 年の関東大震災、1995 年の阪神淡路大震災、2011 年の東日本大震災が挙げられるでしょう。そして、今年の元旦には能登半島地震が起き、甚大な被害が及びました。それでも、これらは「最後の審判前夜」と呼べるものではありません。おそらく、かつて誰も経験したことのないような大地震がその時には世界を襲うものと思われます。

b. 天体の異変

太陽は毛織の粗布のように暗くなり、月は全体が血のようになって、天の星は地上に落ちた。

まるで、いちじくの青い実が、大風に揺さぶられて振り落とされるようであった。（6:12b-13）

先には地震における地上の異変が示されていましたが、ここでは天体の異変について語られています。太陽、月、星が従来の機能を果たさなくなるのです。

「**太陽**」は昼を司ってきましたが、その任務の遂行をやめ「**毛織の粗布のように暗く**」なる。粗布は山羊やらくだの毛で織った粗い織物で、悲しみや不幸を表現するときに用いられました。この地域の山羊が黒かったことから、太陽の光が見えない「暗さ」を表しているようです。昨今、太陽フレアの問題が話題となっており、今年の元旦には X5.0 が発生。規模の大きなものになると地球上のすべての電子機器を破壊してしまうといいます。もしそうなると、地球の周りを回っている２万個の衛星も機能しなくなり、現代文明は崩壊するでしょう。しかし、ここで言われていることはそれよりもはるかに大きな天体の異変であります。

「**月**」が血のように赤くなる。皆既月食のときに不気味な月を見たことがありますが、それともまた違うようです。血の色は不吉のしるしでありますが、この時には月はもはや夜道を照らす役割を果たさず、最後の輝きが失われていくということでしょう。月については様々な伝承があり、その裏側はなぜか地球人に隠されているとか、NASA が保有している写真が公に出回らないようにされているといった話があります。

「**天の星**」が地上に落ちるとは何を意味するのか。隕石となって地上に落ちてくるもの、地球の気候を完全に破壊してしまうほどの影響力を持つもののことが言われているのでしょう。「**いちじくの青い実**」は冬に出てきますが、その季節には葉がないため簡単に木から吹き飛ばされてしまうようです。そのように、隕石がバラバラと落ちてくることを言い表していると思われます。

c．天の崩壊

天は巻物が巻き取られるように消え去り、（6:14a）

当時の世界観では、空を巻物のように捉え、星をそれに記された文字として見ていたようです。その巻物が真ん中から裂け、二つに分かれてしまう。そのような情景が絵画的に描かれているのですが、これは現在の世界が全く形を失うことを言い表しているのでしょう。

天の全軍は朽ち果て、天は巻物のように巻かれる。その全軍は枯れ落ちる。ぶどうの葉が枯れ落ち、いちじくが木から枯れ落ちるように。（イザヤ 34:4）

d．地形の変動

山も島も、みなその場所から移された。（6:14b）

天が著しい変化を見せたと同時に、地にも異変が生じる。大地震の結果、地形そのものが変わってしまうのです。私たちが世界地図で見てきたものとは全く違う世界になる。過去にも地球は何億年という単位で巨大な変化を遂げ、大陸の移動や衝突によって現在の山脈が形成されたと言われています。ヒマラヤ山脈の上の方でアンモナイトの化石が見つかっており、そこはかつて海の底であったことを示しています。途方もない時間の中で、地球は大変革を遂げてきている。しかし、世の終わりにはそれを上回る出来事が起きるのかもしれません。

いずれにせよ、ここまで見てきた描写はほとんど旧約聖書の預言から引用されており、科学的に説明しているものではありません。当時の人の目にどう映るか、彼らもまた想像の域を超えることはなかったでしょう。現代に生きる私たちにも終末的な天変地異は想像しきれぬ面が多いですが、かつて誰も経験したことのないことが短時間のうちに起きるのだと思われます。

<u>本論Ｂ．神に敵対する者の絶望</u>

15 節以下には、この終末的光景を目の当たりにした人々の絶望的な行動と言葉が記されています。ここに登場する人々は、神の民ではなく、神に敵対してきた人々だと思われます。彼らが喜びをもって贖い主を迎えていないからです。

a．神に敵対する者の行動

地上の王、高官、将校、富める者、力ある者、また、すべての奴隷も自由人も洞穴や山の岩間に身を隠した。（6:15）

ここには七つの地位の人々のリストが挙げられていますが、一言で言えば「あらゆる身分の人々」ということになります。世界中のあらゆる人々が区別なく見ることになる世の終わりの光景、天変地異。それを免れ得る人はいない。しかし、ここでは用語の使い分けがあるので、念のため調べてみましょう。

イ．**地上の王**…目に見える権力者としての王、大統領、首相、その上に君臨する闇の勢力
ロ．**高官**……貴族、貴人とも訳せる言葉で、家系的なエリート階級
ハ．**将校**……新約聖書の時代にはローマの千人隊長を指したが、高級将校全般を表す
ニ．**富める者**…18 章では「地上の商人たち」。フェニキア系の金貸しを指すか
ホ．**力ある者**…「勇士」とも訳せる。戦いにおいて力を発揮する者
ヘ．**奴隷**……生まれつき身分が低く、何らかの意味で人身売買を経験した人々
ト．**自由人**……身分は低いが奴隷は免れた人々

現代の世界は、奴隷制度がない国でも本質的に奴隷のように扱われているということがあり、王たる身分であっても更に上の隠れた勢力によって立てられたピエロに過ぎないということもあります。いずれにしても、あらゆる身分の中にも神に聞き従わない人々が存在するということが分かる。それは、ここでは彼らが「**洞穴や山の岩間に身を隠し**」ているからです。これは戦火や敵の手を逃れる行為ではありますが、彼らは神の目を避けて隠れているのです。贖い主を喜んで迎えることができない人々、罪の問題と向き合わなかった人々が取る行動、それが神から隠れるということであります。アダムとエバが罪を犯した後で取った行動を彷彿とさせます。

b. 敵対者の叫び

そして、山と岩に向かって言った。「私たちの上に覆いかぶさって、玉座におられる方の顔と小羊の怒りから、私たちをかくまってくれ。神と小羊の大いなる怒りの日が来たのだ。誰がそれに耐えられようか。」（6:16-17）

最後の審判の時が到来したことを知り、神に敵対してきた人々はパニックになり、どんな手段でもいいから神の前に出なくてすむ道を探し求めます。山と岩に向かって「**私たちの上に覆いかぶさってくれ**」と求めていますが、そんなことになったら死ぬ以外にないことは誰にでも分かるでしょう。しかし、その方がまだ「**神と小羊の大いなる怒り**」にふれるよりはマシだと言うのです。彼らが恐れているのは永遠の審きの判定です。ここでは主イエスが「**小羊**」と呼ばれており、父なる神様と同格で審判の座に就いておられることが分かります。主イエスは何を基準に人々を審かれるか。それは、ご自身との契約が結ばれているかどうか、その一点においてです。主イエスの十字架の贖いを受け入れたか、キリストの義を身に纏っているか、ただそれだけが人の永遠の行き先を決定するのです。ここで審きを恐れている人々が言っていることを読み取るならば、彼らは最後の最後まで悔い改めには至らなかったのです。ただ神の目を避けて逃げ惑うばかりで、心を入れ替えることはない。悔い改めるべき時は過ぎ去ったのです。

【結論】

世の終わりの審きは必ずやってくる、それが聖書の約束しているところです。主イエスが天に昇られてから2000年以上経った今も尚、その日は来ていません。しかし、その日は着実に近づいているのであって、すべての人がキリストにある神との正しい関係に入るよう招かれています。ここに描かれている世の終わりの天変地異はすべての人が目にすることになり、信仰者も例外ではありません。しかし、主イエスを信じる人は恐れる必要がないのです。贖いが完成する日が来たからです。天変地異は、古い世界が新天新地へと造り変えられるための最終段階であり、慰めの時の訪れでもあります。信じる者はその日を喜ぶことができるのです。世界が大きく揺り動かされるのを見るとき、私たちはどのような意識を抱いているでしょうか。恐れることなく、主の最終的な御業を目に留めたいと思います。心備えてその日を迎えることこそが重要なのです。

【祈り】

贖い主なるイエス・キリストの父なる神様。被造世界全体が贖われることを願っています。人の手によって苦しんできた世界が、贖いの日の前夜には最終的な変革を起こすでしょう。今私たちが見ている世界はどの段階にあるのでしょうか。いずれにしても、私たちは自分の人生の終わりの日と向き合わなくてはなりません。その日が来るとき、私たちがキリストのものであるということこそが重要であります。私たちの信仰を確かなものとし、神の御手の業のすべてを平安のうちに見届けることができるよう導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
終わりの時のしるしをあらかじめ示し、その日に備えさせ給う、父なる神の愛、
ご自分との確かな関係のなかで、贖われた者を常に守り給う、主イエス・キリストの恵み、
悔い改めの実を結ばせ、神と小羊との前に立派に立たせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。